

四十五 失望の時代

かつてフランスには、ヴォルテールやルソーなどの出入りする高尚なサロンがあつた。もちろん大部分のサロンはそういうレヴェルに達していなかっただろう。だが、現代人が注意すべきことは、交わされた会話の質を問題にしなければ、当時のヨーロッパの貴族・上層ブルジョアの子弟が、相応の教育を受けて広い教養をもっていたことである。現在この国で公衆の目にするサロンは、どの家にもある箱の中にある。それを一見しただけで、かつてのどのサロンのレヴェルにも及ばないだろうことを知る。いなかに住む老園丁は、出席したくなる談話の場がほかにどのくらいあるか知らない。しかしあの箱には、各種の権力にありついた人間たちも顔を出して発言するので、ある程度その水準を推し量ることができる。使われる言葉は共通していて、関心も考え方も箱サロンから大きく乖離してないように思えない。一国の首相がそこで使われる言葉をうまく飾って語れば、虚実を検証することはほとんど行われないから、その効果は確実に世論調査に表われて、政権に長くとどまることができるのである。現代人はここで、マス・メディアが、サロンの主催者で、世論に影響力をもつ一つの権力であることを知っておかなければならない。

数十万人を超える人間が暮らす社会の動きは複雑で、権力に近い者も含めて個人が社会を変えることはめったにできないから、各人は大なり小なりこういう状況に掉さして暮らさざるをえない。そこでどういう生き方をすればよいのか、古来、それが人間の課題であった。小さなサロンを出た社会で自由に思想を發表することができない時代にも、ヴォルテールやルソーなど非凡な人たちはその才能を發揮したが、言論の自由がたてまえの現代、大きな社会全体がサロンのような装いを帯びて、おびただしい発言が世間にあふれている。この浮動の陰に隠されて、価値ある知識も思想も目立たず広まることがむずかしいほどだ。この状況の中で、凡人は値打ちのあるものを探さなければならない……。とりとめのないことを考えているが、今日のこの国の状態への不安がそうさせるのである。

現代社会の表層の底には大きな危機が潜んでいる。いや、それは隠れているのではない。最近も、ドイツのW・シュトレークという人が、四十年來の危機とその様相を、『時間かぜの資本主義』とふさわしい名で呼んで、説き明かしている。社会学者は先進諸国の危機を経済から社会にまでつなげて考える。現代の金融資本主義経済は、直面している困難をも利潤獲得に利用し、民主主義社会を巻きこんで社会生活を歪めつつあるのだ、と。

第二次世界大戦の悲慘のあと、復興をめざす人々の意志に協調が生まれ、人間社会は少

しましな歩み方をした。戦勝国も敗戦国も先進諸国は、資本主義経済の無慈悲をやわらげて、大なり小なり福祉国家となった。増加する人口への以前よりも多い分配など、諸条件がうまくかみ合いその歩みを推進したのである。しかし一九七〇年ころ、循環する好条件が尽きて、拡大成長は終わった。以来、資本は利潤をあげる場を血まなこで探し求め、人々はそのしわよせを受け、社会は昔の資本蓄積時代に似た状態へ後退しつつある。その新自由主義の主要な特徴を、シュトレークは「貨幣で時間を買って、社会内対立をなだめながら、危機を先送りする策」だと言う。

経過した四十年余りを四つのフェイズに分けることができる。最初の一九七〇年代は、輪転機で紙幣を印刷して、生産性を上回る賃金上昇の容認。それは、財政規律のたがを外し、インフレーションを容認すること。いつまでも続けられないから、次の八〇年代には、インフレ抑止策。低賃金の非正規雇用の拡大・公的資産の売却など、新自由主義の本格的始動。その結果、デフレーション、景気後退、失業率上昇。そこで、税収不足を穴埋めし、社会保障費の急激な縮小を防ぐために、国債の発行。しかし、国の借金の増大には限度があるから、九〇年代からは、社会保障費の削減など、財政をつくろう方向への転換。それを全体的に見ると、金融機関からのローンで家計に債務を負担させて、国家債務の増加を防いだのである。ここからバブルが発生し、結局二十一世紀に、リーマン・ショックで破

綻。以来、銀行危機・国家の債務危機・マクロ経済危機の三つの複合危機は深まるばかりである。現在進行中の第四フェイズで、せっせと時間を買いつけているのは各国の中央銀行。中央銀行は、お金をゼロ金利で市場に供給し、国債を購入し、株を購入している。だれにも分かることだが、このカンフル剤がいつまでも効くはずはない。

こう指摘されてみれば、七〇年代から戦後の成果を失いつつなされている政策はみな、錯覚を与えるマジックだと分かる。日本のこととして考えると、敗戦と占領のあとに形成された社会は、今、資本制経済の行きづまりと道行きをともし、危機に直面しているのである。ところで社会学者シュートレークは、「あらゆる社会的なものは時代の中で営まれ、時代とともに発展し、そして時代の中で、時代とともに次第に似かよった相貌を呈するようになっていく」と言う。これに、史家のたどりついた経験法則「社会的機能を果たし終えた統治は頹廢的となり、統治者は道徳的に腐敗する。そして、住民も統治者の頹廢を分かち持つ」を付加すれば、「貨幣で危機を先送りするごまかし」は今の政治経済体制の退廃を実証していることになる。この国で箱サロンが見せているのは、そういう社会の相貌なのだ。

四十年来、すべての人々がマジック・ショウを目にして、深層心理に大きな影響を受け

ているにちがいない。意識の底に堆積しつつあるのは何だろうか。「幻滅」という表現では言い足りないので、「失望」と呼んでおこう。箱サロンから目を背ける者は、今日を「失望の時代」と観る。

定年の三年前に辞表を提出して失望する時代に暮らす老人の思索は、次のような問いに向かった。昔から、自分の非力を味わい、醜いことの多い世に望みをかけることもできず、世間から退いて暮らす人があったけれど、現代社会ではどのようにすればよいのだろうか。そして、迷妄は遠く陶潜に飛んだ。彼の時代も現代のように退廃に失望する時代だったのだろうか。敬愛する人はそこで何を考えたのだろうか。その失望の時代をもう少し知りたいと思い、老園丁に読める日本語の書物を探した。表題からして一番望みをかなえそうに思われたのが、石川忠久著『陶淵明とその時代』だった。著者は、隠逸が最も流行したのは晋の時代だったと言う。そして、その隠逸は、ある種のポーズで、一定の名誉ある地位を占めるための手段であって、陶淵明の隠逸も例外ではないとする。わたしは、陶潜に対するこの見方に同意できない。この書物は、「その時代」について、主に上層人士や知識人の処世の仕方を記すだけで、淵明の思想に踏み込まず、時代の全体状況もしくは時代の「失望」を考えない。わたしの思索は道を失った。

仕方がないから、陶潜の生きた西暦四〇〇年前後の歴史をなぞつてみた。三八三年、東晋が、淝水の戦いで異民族の北朝「前秦」の侵攻を撃退した。陶潜が二十歳前のことだ。青年は、南朝東晋の成立期に大司馬まで進んだ曾祖父を誇りにしていたから、自国の勝利を喜んだだろう。しかし国は安定したのではなく、皇帝が暗殺されるなど世は不穏なまま。流行の「老莊思想」よりも儒学に親しんだ人は、どうも地方官として身過ぎたらしい。危機は、三九九年、「五斗米道」の秘術師の率いる反乱をきっかけに破裂した。国家の危急に志願したのか陶潜は東の軍都に行き鎮定軍の幕僚となる。だがそれは性に合わなかったのだろう、軍で手柄を挙げようとした形跡はない。故郷に帰って、今度は西の中心都市江陵で出仕したものの、休暇をとったりして出世に精出した風でもない。四〇一年の暮れからは、母の喪に服すために帰郷したままだったらしい。三九九年以来、反乱に誘発されて、国中で兵権の争奪戦が続いていた。四〇三年、二年前まで陶潜の出仕した江陵の長だった劉玄(西の軍団を支配していた)が皇帝の位を奪ったら、翌年、それを倒した東の將軍劉裕が東晋を牛耳るようになる。四〇五年、陶潜は、県令(日本の郡の長に当たる)になったものの、八十日余りで、名高い「帰去来兮の辞」を書いて園田に帰る。その田舎であの人は、四二〇年五十六歳の時、劉裕が晋の皇帝を廃して新王朝宋を建ててのを見、さらに七年、宋王朝の支配する国で生涯を過ごしたのである。

やはり、失望の時代である。当時、一人陶淵明だけが失望したのではないだろう。だが、自己の非力と生を享けた時代に対する失望を心の底で受けとめた陶潜は、そこから人生を見つめてあの深い意味を潜めた詩文をつくりえた。蘇東坡が淵明の詩文を杜甫よりも豊かだとしたことをわたしは是としよう。そしてまた、陶淵明を評価した人たち、杜甫も蘇東坡も魯迅もそれぞれ失望の時代を生きたことに思い当たる。

視点を引いて歴史を眺めれば、西暦四〇〇年前後だけが乱れていたのではない。後漢の体制が緩んで、危機が一八〇年代に黄巾の乱として破裂して以来、魏晋南北朝の四〇〇年余り、平和な時代が長く続いたことはなく、年表は、次々に戦いが起き、兵権を握った者が順に帝位を篡奪したことを記す。老人はそれらの王朝名全部を暗唱することができない。こうして、危機はいつの時代にも潜み、どの時代もなんとかやりくりをつけながら次代へ移っていったことを知る。どの時代にも、失望を味わった多くの人々がいただろう。だが失望を条件づける世の構造は違っていた。農地を所有する大小の貴族・士族・地主が政治の主要なアクターだった時代と、資本主義経済のもと資本の運動に関与できる人間たちと選挙で選ばれた代議員とが経済と政治とをリードする時代とは異なる。失望の様相は違うのである。歴史を読んで漠然と判ることは、現在の危機がいつかなんらかの形で爆発しな

ければ、この社会は退廃から脱出することができないだろう、ということである。

結局、わたしは最初の問いに戻ってしまう。今日自分の無力と世に失望する者は、危機の破裂という不安をかかえながら、現代の問題を見つめて生きる道を探るほかはないのである。生きることには拙い者にできることは先人の生き方にヒントを探し模索することだけ。ところで、この小文の表題を考えたとき絶望という言葉が思い浮かんだけれどもそれを採用しなかった。それは、陶淵明・杜甫・蘇東坡・魯迅たち、また、ヴォルテールやルソーは、人生に絶望することがなかったと考えるからである。

もう一度、『陶淵明全集』を読んでみよう。

五月の朝刊のコラム「折々のことば」に、異なる文脈の文中にあるのだが、魯迅の次のような言葉が引いてあった。「希望とは本来あるとも言えないし、ないとも言えない」。

二〇一六年、九月